PRO-LIFE
中絶に反対する運動　1999年8月 No.106
胎児を守る運動

心の痛み

オクラホマシティーでの悲劇の爆発事件から、一年以上がたつ。私は今も、世界中の沢山の人と同様、あの事件をはっきりと覚えている。

ＴＷＡ８００機の爆発事故を除いて、最近の歴史の中で、オクラホマシティー爆発事件の衝撃程に私達の心を震え上がらせたものはない。「どうしてこんな事ができるのか？」と誰もが聞く。「殺されたあの子ども達を見てごらん」と別の人が涙を流す。思いは深い。

私達の心に最も響いたのは、子ども達の死であった。ＣＮＮ放送に釘付けになり、あの強烈なシーンに驚愕して見入っていた。私達は、一日経つごとに増えていく、建物の残骸の中から運び出される小さな壊れてしまった身体を恐ろしい気持ちで見ていた。一つの遺体が運び出されるごとに、これで又もう一人の母親の泣き声が亡くなった子に対する心からの泣き声の合唱に加わると私達は思い知った。アルフレッド・Ｐ・ミュラー連邦ビルのがれきの下からは、全部で百六十八人の犠牲者が運び出され、その内16人が子どもだった。

なぜ私達は、悲劇が子ども達に降りかかると、心の奥底にまで痛みを感じるのであろうか。爆発事件で最も心が痛んだシーンの一つは、腕に幼児を抱きかかえた消防士を写した写真である。この写真が撮られたすぐ後にその子どもが亡くなったとわかり、更に痛ましかったのであるが、この写真は、香港、イギリス、インドからオーストラリアまでの新聞に載った。おそらく私達が悲しむのは、子ども達の罪のなさを思うためであろう。おそらく私達が嘆くのは、幼い者達が失ったこの先の長い人生を思うためであろう。そして子ども達が人間社会の未来の希望である事を知っているから、私達の損失として嘆くのだろう。

しかし、そんなに子ども達を愛しているのなら、何故、子ども達を中絶で殺すのを許しているのかを説明して欲しい。どうしてオクラホマシティー事件で亡くなった生後４ヶ月の乳児の死の方が、中絶医の手による12週目の胎児の死より悲劇的であるのか教えて欲しい。オクラホマシティー爆発の犯人はおそらく政治的動機で行ったであろうし、中絶医の動機はお金であろう。しかし、子ども達は両方の場合とも、憐れみとまでは言わなくとも、愛情を受けるべき人間ではないか。

中絶された子ども達の数を知れば、あまりの多さに私達の心は、日々死に追いやられている子ども達の叫び声が聞こえない程に、無感覚になってしまっているのであろうかと思う。生命は中絶によって、計り知れない程に軽んじられてしまった。その事を実証するには、一般新聞紙にざっと目を通してみるだけで事足りる。一時は中絶について、心の底から恐れを感じ、団結して反対したであろうに、今ではみんな慣れてしまったようで、膨大な中絶死者の数を新聞から拾っても、ぼんやりと過ごしてしまっている。「一つの死は悲劇である。百万の死は統計である」とジョゼフ・スターリンが言った通りになっている。

オクラホマシティーの爆発事件を悲劇だととらえておきながら、その一部分の人が同時に、中絶は女性の持つ有効な「選択肢」であるとしているのは、皮肉なことである。生まれる前の子ども達は、子ども預かり所で閉じ込められた子ども達と全く同じだけ人間であり、命の重さも同じであるという事をどうしてその人達はわからないのであろうか。オクラホマシティー爆発事件が殺された子ども達とその悲しんでいる家族にとって悲劇であるのが確かなのと同じだけ確かに、生まれる前の子ども達にとって中絶とは悲劇なのである。

すべての中絶は生きている人間を殺し、その子が神から与えられた生きる権利を奪うものである。生まれる前の赤ちゃんが人間以外の何者でもない事は、科学的にも証明されている（そしてほとんどの高校や大学の生物の教科書で実証されている）。生物学的に言っても、同じ種同士で交われば、そこに出来る子どもは必ず親と同じ種である。言い替えれば、人間プラス人間の答えは常に、人間になるのである。科学者達はこれが事実であると知っており、彼等が自分に正直であれば、人間の一番初めの姿とは、受胎の瞬間つまり女性の卵子が男性の精子を受け入れた時以外にはありえない事を認めるであろう。生まれる前の赤ちゃんが完全な人間である限り、生まれた後の赤ちゃんがこの社会で受けているのと同様に、その子達も保護を受けて当然なはずである。

私はオクラホマシティーで殺された子ども達を思うと悲しい。あの子達が、中絶された仲間の子ども達と同じように、天国で幸せを見つけられますようにと祈る。そして、私は生まれる前の赤ちゃんの損失をも悲しむ。社会として中絶を取り入れてしまってから、私達は史上最も極悪な子どもへの虐待を許してしまった。いつの日かみんなが真実に向けて目を開き、耳と心を開き、今こそ子ども達を愛し守る時であり、殺す時ではないと気が付く事を私は祈る。

ジャック・R・ヴォルツ

中絶がもたらす精神的な様々な問題

序言

十年間、私達は中絶支持の人々に、中絶から生じるマイナスの影響は全くないと言われてきました。しかし、中絶の精神的な後遺症に苦しんでいる女性達は、精神的な影響は強烈なものでいつまでも残るものだと言い続けています。

受けるダメージ

中絶直後の反応は安堵、つまり未知なるものに対する恐怖がもう無いことに対する安堵かもしれません。しかし、それ以後についてはどうでしょうか。一ヶ月、一年、十年後はどうでしょうか。綿密な研究によって報告されている結果は、どれも同じようなものです。精神的なダメージは次のような形をとっています。罪悪感、不安、うつ状態、喪失感、敵意、自殺、精神病などです。そして女性はこれらのどれか一つというのではなく、これらがいくつか組み合わさった困難な状態に苦しんでいるのです。

罪悪感

中絶に対する罪悪感はしばしば起き、何年かくすぶり続けるかもしれない反応です。罪悪感に直面している女性は、「私は赤ちゃんを殺してしまった。」とか、「私は間違ったことをしてしまった。」などと言います。

多くの兆候は、解決されていない罪悪感が原因であることがあります。うつ状態、自己批判、コンプレックス、そして不妊やセックスに対する恐怖のような兆候があげられます。

不安

不安は中絶をした後に、女性がひどく感じ口にするものです。女性は、「私、気が狂いそう。」とか「毎日恐怖の連続だわ。」などと叫びます。

多くの女性は身体的な合併症について心配しています。しばしば女性達はもう二度と子どもを産めないかもしれないと不安になります。身体的な問題の兆候が全く無い場合もあれば、流産や子宮外妊娠のような兆候がある場合もあります。

うつ状態

女性は自分達の中絶経験について語る時、しばしばうつ病の兆候を口にします。多くの人が全く身動きができないという感じをもちます。中絶以来、誰にも、何にも興味が持てないのです。誰にも話しかけないし、仕事にも行きません。生活のどの領域においてもうまくいきません。要するに、彼女達は、周りの人々から疎外され、信頼できる人が誰もいないと感じるのです。

うつ状態にある時、多くの女性は中絶以来ずっと泣き暮らしているのです。彼女達は、「私はいつも泣いています。」と言います。

また不眠症になったり、生きていれば、このくらいの年の子どもになっただろうと思い、その年ごろの子どもの夢を見たりする女性もいます。絶えず中絶時のことがよみがえってきて、苦しめられる女性もいます。

患者が中年になったころに起こるうつ状態の時、二十年、まだもっと前に起こった中絶に関する良心の呵責や罪悪感を口にするのをカウンセラーはしばしば耳にします。そして彼女がそのことでカウンセラーのところに相談にきた別の問題のことを話しているうちに、中絶が原因の、患者の精神的な苦痛が表面に現れてきます。

胎児の異常を発見するために羊水穿刺を経験し、中絶を選んだ家族もまた精神的なショックを受ける危険があります。研究によれば、このような中絶を選択した後に起こるうつ状態の発生率は女性については92％、男性については82％に昇り、その数値は死産の場合よりもはるかに大きいことがわかっています。

胎児の死の原因がその違いを生むのです。死産は普通、不運な事故であると考えられていますが、中絶を選んだ場合には、赤ちゃんの死は計画的な選択の結果なのです。

喪失感

決してこの世に存在することのない赤ちゃんを失ったという感覚を女性ははっきり口にします。女性達の話によると、いくつかの反応が起こっていることがわかります。「赤ちゃんや小さい子どもや妊娠した女性を見ることができない。」とか、「母になっている人がうらやましい。」とか、「失った子どもを取り戻すためにもう一度妊娠したい。」等と言います。

しばしば女性は苦しみを増すことになる他の喪失も同時に経験するのです。中絶以来、恋人との関係が悪くなったり、さらには全く破綻をきたしてしまうこともあります。中絶後、自分達を見捨てたり、又は自分達の心の苦しみに対する配慮の無い夫やボーイフレンドに対する悩みや混乱がつのります。

もう一つ失うものは、中絶前は女性が大切に持ち続けていたにもかかわらず、中絶によって全く破壊されてしまう自尊心や価値観です。彼女達は前に持っていた価値観に反することをしたことで自分に失望するのです。彼女達は自分自身を今では「野蛮だ」とか「愛や子どもを産むのに値しない」とか「卑怯者だ」とか言います。

怒り

女性は中絶に関わった人々に対して怒りを感じ、それを表します。その人々とは、たとえば、自分自身、カウンセラー、医師、ボーイフレンド、配偶者などです。

怒りは「中絶のもう一つの側面を提示しなかった」、又は「身体的、精神的問題の可能性について警告しなかった」医師やカ

ウンセラーに対して向けられます。

ある女性は、「中絶の後、私が精神的に苦しんでいる時、病院の誰も私に二度と会いたがりませんでした。」と言っています。

夫やボーイフレンドは、女性が心から助けと理解を求めている時に支えとならない場合や、女性に中絶をするように促したり、強いたりした場合には怒りの原因になります。

自分が抱いていた価値観と異なる行動を取った時、女性は自分に失望するだけでなく、自分に対して怒りも感じます。

怒りと共に、女性が中絶の前後に助けを求めに行ったいわゆる専門家にだまされ利用されたと感じています。多くの女性が、「あなたの妊娠は単なる組織の一部にすぎない。」とか、「そのことを殺人などと考えず、また生理が始まったぐらいに考えなさい。」とか間違った情報を与えられたと言っています。

女性は中絶の方法やその身体的、精神的な危険や中絶に代わりうる選択肢について知らされないので、怒り、敵意を持ち、憤慨するのです。女性達はどうしようもなく無力な「犠牲者」という感じを抱かされ、そして今も人と接するとそのように感じると言っています。

中絶をしたことを後悔し、中絶が問題解決の道だと強く主張したカウンセラーや医師や夫やボーイフレンドに利用されたと感じている女性達は、中絶後の相談にのるグループを結成しつつあります。そのようなグループを結成している女性やそのグループへの参加を続けている女性は、全員が自分達が特に罪悪感やうつ状態をはじめとする問題を抱えていることを知っており、自分が行なったことが間違ったことだと思っています。これらの相談のグループは、妊娠して困っている女性に、赤ちゃんを無事に出産させ、出産後、育児面でも必要な援助の手を差し伸べています。

自殺

中絶をした後の自殺という問題が増加しています。中絶されてなかったら生まれてきた予想日に自殺未遂や自殺が増加していることが医師や研究者やカウンセラーによって報告されています。

一例をあげると、17才の少女が飲酒運転をして車を大破する事故を起こして自殺を図りました。彼女は事故の現場から歩き去り、墓地で座っているところを発見されました。中絶を受けている間に、彼女は赤ちゃんの出産予定日を計算していて、まさにその日に事故が起こったのでした。

結論

中絶をした人達は、自分達が精神的な代償を払ったと言っています。彼女達の自己イメージや人間関係、精神的な安定や人生の様々なことにうまく対処できる能力は時に修復不可能などにそこなわれることがあります。精神的な反応は即座に現れ、長期間にわたって続きます。精神的に女性は危機と絶望の状態にあるのです。そして中絶の後遺症は中絶をした女性にとどまらず、彼女の周囲の、彼女にとって大切な人々にも影響を与えるのです。

中絶を支持する人々が中絶の精神的な問題を否定することは、女性に対する配慮の欠けていることと、女性を利用することを示すものです。中絶によって引き起こされる精神的な問題について女性はあまりよく知らされておらず、準備もできていません。そして、これらの困難に女性が苦しんでいる時、そのような苦痛は存在していないと言われるのです。このように否定することは救いの手を妨げることになります。そして必要とされる援助がないことは回復を否定することになり、そのことによって精神的に混乱した女性の存在を持続させることになるのです。

バーバラ・リボウ

NFPと産児制限

「見よ、子らは主の贈り物、胎の実は主の報いである。若いときの子らは、つわものの手にある矢のようだ。幸せなのはその矢で、矢筒を満たした者。」（詩篇一二七：3～4）

だが今の時代に大家族に恵まれたい人なんているだろうか。そんな人はほとんどいないだろう。だから皆、人工的な産児制限をしようとする。ピル、コンドーム、そして、中絶だ。

しかし、子どもは素晴らしい恵みだと聖書に書いてある！神は、子どもを世に送り出すという偉業を成し遂げる役目を私達にも分け与えて下さる。神はこの特別な能力を与えて下さると同時に、その能力をどのように使うべきかの指針も与えて下さった。セックスは素晴らしいものだが、一方では正しく使わないことがある。教会が産児制限に対して強い姿勢でのぞんでいるゆえんである。

神は、共に新しい生命をこの世に送り出すため、そして夫婦の真実の愛の証として、性行為をお考えになられた。もし私達が、生命を与えるチャンスと真実の愛というセックスの真髄を両方とも捨て去るのなら、それは神の創造物をおもちゃにするようなものである。

では、正当な理由があって今妊娠しては困るといったやむを得ぬ状況にあったなら、その家庭はどうすればいいのだろうか。お教えしよう。神はこんな自然な方法を授けて下さっている。それは自然な家族計画（ＮＦＰ）と呼ばれるものである。

ＮＦＰを行うことは神の御意思にそう事である。夫婦は、まず排卵日（妊娠可能日）を割り出し、当分は妊娠したくないという正当な理由があれば、排卵日にはしばらくセックスをしないようにすればよい。月にわずか五日から九日間ほどである。そして家族にもう一人子どもがいても良いとなったら、その時は排卵日を利用して妊娠するよう試みればよい。

これがＮＦＰの素晴らしい利点である。妊娠するようにも出来るし、しないようにも出来る。それに大きな副産物もある。夫婦がＮＦＰを実行する時には話し合いが必要となる。話し合う事によって、コミュニケーションがお互い良く取れるようになる。又、世間の離婚率は50％であるのに対してＮＦＰを実行している夫婦の離婚率はわずか２％である！

養父母の条件

妻のレイチェルとともに、養子縁組みの国際オリエンテーション・セッションに参加したのは、私にとって興奮すべき事柄だった。私達夫婦には、年齢や収入のせいではなく、私が車椅子生活者であるという理由で、娘を持つ夢に大きな壁があった。

ある日自転車で通勤途中に、私は車に跳ねられ、脊髄を損傷した。その結果、残りの人生を下半身不随で過ごすことを余儀なくされた。胴体から下は麻痺してしまったが、行動が制限されたからといって、私自身の行動的な生活までが制限されたわけではなかった。フルタイムで働き、障害者用の車を運転し、家族とキャンプやハイキングをする生活を以前と同じように楽しんでいた。家族でやったサッカーの試合中に、私に手を使うことを許してくれた双子の息子達には、私は尊敬すべき父親だった。しかし、こんな私も養子縁組の世界では、虚弱で世話の必要な典型的な身体障害者としか見てもらえず、国際的な養子縁組のチャンスは少なかった。私達夫婦は最初、ラテン・アメリカに養子を求めた。私と妻は、ラテン・アメリカの風土がなんとなく好きで、特にその文化が気に入っていた。私達は一九九0年にメキシコに住んでいた。妻は学生、私はパートタイムの主夫兼ジャーナリストとして、生活していた。妻はさらにその後、グゥアテマラとパラグアイに住んだ。だから、オリエンテーションが終わって一ヶ月もたたないうちに、エクアドルの窓口の人物が私達の町に来ると知って、私達は大喜びした。

妻のスペイン語能力は、相手にいい印象を与えたようだった。私達の面接は、次回の面接を約束して、感じよく終わった。しかし、その後一週間もたたないうちに、エクアドルの代表者から短い手紙が送られてきた。「残念ながら、養父の身体障害により、養子縁組みさせていただくことができませんでした。」

そのほかの国でも、私達はリストから次々と消えていった。ペルーにもボリビアにも拒否された。コロンビアとグゥアテマラには、医療専門家による手紙、写真、推薦状を送付しなくてはならなかった。私達は、もっと年齢が上の子とか、特別な世話の必要な子ならば縁組みももっと簡単だと伝えられた。落胆のあまり呆然として、私達は計画を棚上げしてしまった。

数ヶ月後、ほかに可能性が見つかるかもしれないと思ったので、私はほかのエージェンシーに尋ねてみた。そのうちのいくつかにはすぐにそっぽを向かれた。あるエージェンシーからの手紙には、愛想もなくこう書かれていた。「希望者は、深刻な医療上の問題や障害を持たず、心身ともに健康であること。」電子メールで返事をくれたほかの州の有名な大きなエージェントのコーディネーターは、コロンビアを検討していた私を失望させた。「交通手段が不十分なため、大変な不自由を感じるかもしれません。私は、ボゴッタで矯正器をつけた子どもが通りを渡ってビルに入るのに手を貸したくらいです。」大きなお世話だ！そして、コロンビアではなく、付き添いがアメリカまで子どもを連れてきてくれるロシアやほかの国はどうかと彼女は書いてよこした。同じことをジャーナリストのジョン・ホッケンベリーに言ったらいいだろう。彼は、対麻痺の体でありながら、サウジ・アラビアのもっとも交通が困難だと言われる地域で、ペルシャ湾戦争を題材にして受賞した人だから。

私は耳を疑わずにはいられなかった。確かに、国際養子縁組を考えるなら、柔軟な対応が必要で、そのときどきによっていろいろな規則に従わなくてはいけない。年齢、未婚かどうか、健康状態（韓国では体重までも）に条件が課せられる。私はこれらの条件一つ一つを満たしているにもかかわらず、多くの国に鼻先でドアを閉められてしまう。障害者を凝り固まったイメージでしか見ていないのだ。

障害者を社会の一員として認めず、受け入れない国が多くあるから、このような反応もある程度は理解できる。これらの国では、ほかの人と同じ移動手段を提供したり、就業を保護するような、民権法がまだない。文化が変われば、障害者の取り扱いもまた変わるのである。

未来の娘が生まれた国への旅、たぶんその旅は楽ではないだろうし、移動にも苦労するだろうけれど、私達夫婦が養子縁組をするにあたって、欠かせない、また最も興味ある旅である。その子の世界で行動し、その文化と土地をできるだけ理解することが、その子の歴史と生い立ちをより理解する方法だと思う。その子の生まれた土地と文化は、過去も未来も彼 女の一部なのだから。

私の生活では、広い出入り口や車椅子用のトイレを探すことも必要である。私は、車椅子に不親切な状況に出会ったとき、それをうまくやりくりし、代替手段を見つけるやり方を身につけた。永遠に座りっぱなしの人物の生活は、これに集約されると思う。予期できない出来事にぶつかることを予期し、途中で行動を調整することがなんでもない柔軟な考え方を発達させること。それに伴ってユーモアの一つも考え付けば、なお楽になる。

妻と私は、我が家に子どもを世話することを約束してくれたエージェントと、信頼できる関係が現在できている。家庭環境調査もうまく進んでおり、ソーシャル・ワーカーも完全に私達の味方である。ラテン・アメリカのいくつかの国に可能性があったのだが、私達はベトナムに目を向けた。ベトナムの私達のエージェンシーは、私達家族との手続きに積極的だった。彼は、私の障害は問題にならないと、即座に保証してくれた。現在、私達のために、養子縁組の手続きを完了するために訪れる必要のある事務所の障害者用の施設を調査してくれている。彼の態度は、会ったときから「大丈夫です。成功しますよ。」という感じだった。

こういった考え方が、養子を求めている障害者の前に立ちはだかる壁を取り除くことにつながる。この考え方がほうぼうに伝染していけば良いのにと願わずにいられない。

ジョン・ツチダ

大きな子どもを引き取ること・・娘自身の人生を守ってあげる

私達が引き取ったのは、私達の3人目の子になる、養子としては二人目の、10歳の女の子だった。その時、他の二人の子ども達はそれぞれ4歳と6歳だった。

異人種間／異文化間での養子縁組みについてはそうでもなかったが、過去にこんなにも虐待を受け、放っておかれ、いくつもの家族をたらい回しにされ、その怒りと悲しみで形成された子どもを引き取ることは、大きな衝撃だった。同じ人種同士、同じ文化を持つ者同士で養子縁組みすることが、自分の受け継いで来たものへの純粋な絆を持つ一番いい機会を子どもに与える、という説が多くある。けれど私達の娘はあまりにも虐待され無視されていたので、彼女は何にも誰にも絆を持つことは出来なかった。私がこれまでわかってきている限りでは、この世界での健全な感情を持つ家族はどの人種であっても、同じ様な特徴を持っている。又虐待の副作用は、どの文化においてもほとんど同じである。

私はアメリカインディアン社会へ強いつながりを持っているので、養子縁組みした家族には文化的絆が存在するということを確かめる特定のステップを描くことが必要だと、強く信じている。しかし同時に私は、どの人種、どの文化の人でも文化に掛かり合おうとする人なら、違う人種の子どもにも良い親になれると思う。多くの場合、人種や文化の面が前面に出てしまい、その子がそれまで生きて来た経験に基づいて新しい両親を考える、という努力が少なすぎると思う。私達の娘の場合では、彼女はそれまで毎日一人でひたすらテレビを見て過ごしていた。学校にも行かなかったので読み書きもできなかった。自分がグループの一員として仲間と触れ合うことなど、私達と家族になるまで一度も経験したことがなかった。

私達にはしばらくの、おそらく数日間程の幸せはあったのだが、いっしょに暮らした何年間かは微妙なプレッシャーのやりとりや、唐突なショックを受けることがほとんどだった。どうしても壊れそうにない、ある種のバリアーがあった。けれど娘は私達家族の外で、外との関係において花を開いた。娘が一番嬉しかったのは、友達が家に泊りに呼んでくれることだった。娘はとても行儀が良く客として完璧で、他の親達は彼女を絶賛してくれていた。

マイケル・ドリスはその著書「壊れた絆」の中でこう言っている。私は、何故人が自伝など書こうとするのか、不思議に思わずにはいられない。その自伝の後に「同じ間違いを犯さないように」という文が続くのであれば、別の話だけれど、「私が何をしてきたか見て」と披露することに、本当の喜びや満足があるとは思えない。

私は母親として家族がうまくいくように動揺したり、弱さを見せたりしなかった。私欲を交えなかったので強かった。私は、自分の目的はすべてあきらめた。そして、生活の必要性にカモフラージュされてはいたが、戦線は引かれていた。もし適当な時期にもっと深く懸案していたら、この養子縁組みが壊れ始めるようなことはなかったかもしれない。しかしもし真剣に懸案していたら、この養子縁組みは始めからまったく実現しなかったかもしれない。最近、私達が利用した養子縁組み事務所は、どの家庭でも一番上の子として子どもを引き取ってはならない、というルールを作った。引き取る子どもは、その家族の中で一番年下でなければならないというわけである。

昨日私の友達が話してくれたのには、もう大人になった彼の息子は小さい時、家ではあまり良い子ではなかったのに、家から出て友達の所へ遊びにいったり親戚を訪ねたりした時には、すばらしく良い子だったそうだ。その子は大人になった今でも同じだという。私の友達は笑って言った。「それはいいことなんだよ、だって息子がこれからの人生を生きていく場は、家の外の大人の世界なんだから。」

私達の娘は幸せだし、自分の価値観を持っているし、悪いことを考えないで未来を見つめている。私は娘に娘の望むような家庭は与えてあげられなかったが、それでも私達の関係に意味はあると思う。もし、いるべき場所があるということが成長することへの足掛りになるなら、私は安堵のため息をつくことが出来る。娘はそとの世界でとてもうまくやっているのだから。

私達のように、ある程度大きくなった子ども達を養子に引き取る者について、ほとんどの人が多くのことを間違って信じている。私達は完全な両親になる巧妙な技術など持っておらず、ただ普通の両親であり、いくらかのわきまえを持って、新しい親になるために習得しなければならない勉強をなんとかこなしているだけである。ある程度育った子どもを養子にするには熱意が必要である。それは予想のつかない、控え目な、濃厚な、そして時には破壊的で奥深い経験である。

テラ・トレバー

養子縁組、中絶に代わる確実な手段

あなた方の中に、養子をもらった人もいれば、自分の赤ちゃんを養子に出した人もいるでしょう。さて、私たちは以前から常に、養子縁組には何らかの有益な点があることを知っていました。養子に出された子どもにとってもこれは紛れもない事実であり、また、養子を受け入れる夫婦にとっても明らかに有益なのです。しかし、それだけでなく、子どもを養子に出す産みの母親にとっても有益であることは事実なのです。

そして、これらの利益となる点は、健康統計学のアメリカセンターのクリスティーン・バカラック教授の調査によって最近確認されました。彼女は最近、「養子縁組計画、養子、養母」という題名のレポートを出版しました。驚くべき調査結果の一つは、養子になった子どもの六十九、五％が女の子だったということです。わずか三十、五％が男の子でした。自分の赤ちゃんを養子に出そうと考えている若い女性にとって、養子縁組を考える際の重要な一面は、養子受け入れ先の結婚生活と家庭の潜在的な安定性です。その家庭が、彼女の赤ちゃんが必要とする愛情に満ちあふれた、完全な結婚生活を送っているかという疑問です。

さて、バカラック教授はこの疑問に対する答えを持っています。教授のデータは、養子を受け入れた家庭と一般的な平均家庭との間に違いがあることを確認しています。現在、全国の離婚率は五十％近くに上ります。ところが、養子を受け入れた家庭の中ではわずか十六％にしか満たないのです。養子縁組の全国委員会はこの点を指摘し、その重要性を強調しています。

しかし、最も重要なのは、この結果が、赤ちゃんを愛しているが故に赤ちゃんにとって一番良いことをしたいという動機から、自分の赤ちゃんを養子に出そうと考えている、心優しい若い女性に、安心感を与えるということです。バカラック教授によって示されたように、若い女性はわが子がとても特別な家庭に入れられているということを知ることで、安心感の中でくつろいで過ごせるのです。

ジョン・C・ウィルキー医学博士

中絶医院へ向かっている女性への公開状

中絶反対のグループは、あなたにいやがらせをしたり、あなたを脅したりするために存在しているのではありません。私たちは、あなたを裁いたり、ばかにしたり、非難したりするために存在しているのでもありません。まさにあなたがどんな気持ちでいるかがわかっているのでここにいるのです。私たちは、予定外の妊娠がひきおこす恐怖やパニックや不安のことを知っています。中絶をするという決断が堪え難いほど苦しいことも知っています。私たちは、あなたがプレッシャーをかけられたり、口をきいてくれなかったり、隠し立てされたりすることを知っているのです。

私たちは、あなたが独りではないということを知らせるためにここにいるのです。そして、あなたがとりうる全ての選択肢のことについて知っているかどうかを尋ねるために、あなたに助けの手を差し伸べ、養子のことについて相談にのってあげられる場所があることに気がついているか確かめるためにここにいるのです。

あなたが自分の体のなかで起こっていることに気がついているかどうか尋ねるために、そして、あなたが本当にこの中絶に同意しているのかどうか、またあなたがボーイフレンドや両親や仲間に、中絶するようにプレッシャーをかけられたり強制されたりしているのではないかどうかを知るために、私たちはここにいるのです。

あなたの問題に対する解決法として、暴力や破壊的行為を受けなければならないということは決してないということをあなたに知ってもらうために、そして希望と癒しとが存在し、自分を許せるようになることがあるとあなたに知らせるために、私たちはここにいるのです。そしてたとえ社会があなたが苦しんでいないと判断しても、その苦しみはそれでも現実のものでしょう。わたしたちは百パーセントあなたを理解し、あなたを思いやり、あなたの支えとなるためにここにいるのです。

プロライフ 1998年

[511]　赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅

[515]　経口避妊薬：ピル

注文：　１－－－－－－５→１部＝￥１００
　　６－－－－－－２０→１部＝￥７５
フルカラー　２１－－－９９９→１部＝￥５０
　　１０００－－以上→１部＝￥３５

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

【プロ・ライフニュース】

[101] １部ご注文.....無料.....　＋　郵送料

【カラー・パンフレット】

[201] 生か死.....　＋　郵送料
[202] 第二の処女生.....　＋　郵送料
[203] デート.....　＋　郵送料
[204] どうするの？.....　＋　郵送料
[205] "NO"という技術.....　＋　郵送料
[206] ティーンの出産コントロール.....　＋　郵送料
[207] バージンの瀬戸際.....　＋　郵送料
[208] しっていましたか.....　＋　郵送料
[209] 親権限と「１０代の性」.....　＋　郵送料
[210] 貞節のすすめ.....　＋　郵送料
[211] 中絶行為は女性を解放しない.....　＋　郵送料

【ポケット・サイズ】

[301] 若い生命「1セット＝カード＋人形」.....30円　＋　郵送料
[303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円　＋　郵送料
[304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円　＋　郵送料
[305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円　＋　郵送料

【ビデオ+ 本 ・ 日本語】

[401] 沈黙の叫び....(VHS/Beta).....7000　＋　郵送料
[403] ビリングス・メソッド.....(VHS/Beta)....7000　＋　郵送料
[404] いのちーーおくりもの.....(VHS).....13000　＋　郵送料
[407] 命美しいもの＝one&only.....(VHS).....20000　＋　郵送料
[409] 聞こえる？天使の鼓動.....(VHS).....6000　＋　郵送料

[500] （本）生命問題に関する...(カトリックの教え)...2987　＋　郵送料
[501] （本）自然な家族計画...(ビリングス・メソッド)...1000　＋　郵送料
[503] （本）プロ・ライフの旅.....300　＋　郵送料
[504] （本）小さな鼓動のメッセージ.....1200　＋　郵送料
[505] （本）いのちをみつめて.....500　＋　郵送料
[506] （本）命あるすべてのものに(マザー・テレサ).....650　＋　郵送料
[507] （本）私の生命を奪わないで.....2300　＋　郵送料
[508] （本）いのちの福音.....1500　＋　郵送料
[509] （本）小さき生命のために.....1300　＋　郵送料
[511] （本）赤ちゃん：最初の十ヶ月...12ページ...100　＋　郵送料
[512]本　日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300　＋　郵送料
[513]本　カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500　＋　郵送料
[514]本　神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300　＋　郵送料
[515] （本）経口避妊薬：ピル.....100　＋　郵送料
[516] （本）いのちの福音と教育.....1470　＋　郵送料

パンフレット申し込は・・・

１～～　５→１部＝３５円
６～～１００→１部＝２５円
１０１～～５００→１部＝２０円
５００～～以上　→１部＝１５円

組み合わせは自由です

同じ過ち

一八五七年三月六日はアメリカの歴史上の汚点ともいうべき日。投票の結果7対2で米上院議会は黒人を法律的に人間と認めないことを可決した。彼らは酷使、売買、痛めつけられ、殺されても構わないことになった。奴隷制度施行である。幸いにも一九六八年憲法第14条の修正により、黒人の完全人権保護が認められ、奴隷制度は廃止され、全ての人間の法のもとの平等が実現した。ここで理解しておくべきは、法律が黒人に平等を与えたわけではないということである。彼らはもともと持っていた権利なのだから！神はあらゆるものを平等に創造した。憲法14条修正により、黒人奴隷が神から与えられた権利を法律でも認めただけのことである。

しかし一九七三年一月二十二日、悪夢は再び訪れた。米上院議会の投票の結果、またもや、7対2で第14条修正条項を、胎内にいる生命には「適用しない」法案を可決した。結局、妊娠中の全期間、母親が中絶により子どもの命を奪ってもいいと認められた。世に言う「ロー対ウェイド裁判」である。この決議により、中絶が50州すべてで合法とされた。アメリカの国民からの要請や承認があっての上ではない。たった7人により決定され、全国民に押し付けられた。7人が胎児は人間でないと判断した結果、法律でその生命は保護されないということになったのである！前世紀、黒人奴隷という別の対象の人権が否定されたように、全ての人間の尊厳を保護しない時代の再来である。人はなぜ同じ過ちを繰り返すのだろう？

子宮内の子どもは私達ひとりひとりと同様の権利を有し、私達と何ら変わらぬ「人間」であるという疑いようのない事実。皆、これを本能で悟っているはずなのに。

現代の生物学や遺伝子学もそれを裏づけている。受胎の瞬間に新しい生命が形成され、決められた46本の染色体をもって誕生する。これらの染色体には、新しい生命のための、あらゆる遺伝情報が記されている。これまでにもこれから先も、全く同じ遺伝子情報をもつ人間は二度と現れない。その人間は誕生の瞬間から固有の存在である。男か女か、肌や瞳の色など、すべては受胎の瞬間に決まる！これは聖書やカトリック教会からの受け売りによる宗教的教えなどではない。世界中の生物学の本に出ている、れっきとした科学的事実である！

だが、私達が立ち上がり、胎児を中絶から守ろうと呼びかけると、勝手な意見や宗教を他人に押し付けるなと言われてしまう！生物学的事実が、一体いつから宗教的教義になったのか？赤ちゃんを殺すべきか殺さざるべきかを問うのが「意見」だなんて？いつのまに「殺人」を選択できる世になったのだろうか？

女性が自分の子どもを殺すことが合法化されるだなんて？それも「個人の自由」だと？赤ちゃんの人権はどうなってしまったのか？赤ちゃんだって人間である。議会や母親が胎児の権利を創り出した訳でもないのだから、彼らの手で権利を奪うことは許されないはずである。「選択」という言葉で行為の正当化はできないし、はなから論外である。

常識ある人間として、私達は声を大にして子どもを殺すのはいけないと主張する義務がある。赤ちゃんのためにも、さらに「母親達のため」にも。彼女らもまた中絶の犠牲者である。彼女たちの苦しみを理解し、愛を注ぐべきだろう。

中絶支持派の言い分は、女性保護のため、子どもを殺すかどうかの「選択」権を与えるべきだという。しかし、それは女性の尊重にはならない。本当に尊重するなら、彼女たちが困っている時に手を貸し、子どもを生かしておくために必要なものを与えるべきである。「危険な妊娠状態」にある人には、妊娠自体を取り除くのではなく、その危険をとりのぞく手助けをすべきである。彼女が直面しているのは「子どもを持つべきか否か」ではない。妊娠しているということは、彼女には「もう子どもがいる」のである。本当に考えるべきは「その子を産むか殺そうか」の選択である。こう書くと、殺す方を選択すべきでないのは明らかなことである。この選択肢を合法化したことで、世の中の雲行きがあやしくなっている。今こそ私達は女性と赤ちゃんに愛を注ぎ、中絶の「選択」が話題にのぼらない世界をつくるべきである。

フランク・パヴォーン

事務所便り

事務所に来る途中の沢山の葉っぱをつけた大きな街路樹は、暑さのしのぎ、ふいの小雨のしばしの雨宿り場所。皆様お元気でお過ごしでしょうか。お伺い申し上げます。

六月に認可されようとしているピル。ピルのことを皆様に知っていただきたく、事務所では小冊子を作って、四月号のニュースとともに皆様のおてもとにお送りいたしました。そして、今も、その小冊子をPRとして産婦人科と公立の中学校、高等学校に送り続けています。お読み頂いた皆様にはきっと、ピルが私達の身体の中でどのように作用するのか、お分かり頂けたことでしょう。

でも、ピルのことを知りたくても、日本語を解せない外国の方々のために、同じサイズの英文小冊子も事務所に置いております。お値段も、日本語と同じく1～6冊まで、@百円、7～20冊まで@75円、21～999冊まで@50円、千冊以上は@35円とお安く致しております。外国人のお知り合いの方がおられましたら、日本語のピルの小冊子と同じように、どうか、PRをお願い致します。

さて、新聞記事は、今月も高知新聞（99・5・7）から選びました。死亡胎児組織使い基礎研究と題する阪大の研究グループのことです。「脳細胞の一部が機能しなくなったパーキンソン病などの治療に応用できるかどうかを、胎児の幹細胞を取り出し培養して研究しようというもの。阪大病院で流産や中絶した、妊娠12週までの胎児を母親に承諾を得て提供してもらう」とのことです。

弱いものへしわ寄せが行く、『医学の発達・医学の研究』や『人助け』という美談の裏にある影の部分をみのがさないで！というのが事務所からの叫びです。

日本プロ・ライフ・ムーブメント